

# 人生を変えた ウルトラ Q 体験

その2

3月号に引き続き、写真家&ヘアデザイナー伊勢祥延さんの人生の転機になったお話。皆様とシェアさせていただきます。

(まほろば編集部)

手術中の全身麻酔が原因で、意識が宇宙空間に至ったウルトラ Q 体験をきっかけに、独立し自分の店を持つことになった伊勢さん。その10年後、ふたたび人生を変える転機が訪れます。

.....

**伊勢：**美容師をやりながら写真の面白さに目覚めて、世界を旅しながら写真家としても活動を始めていたんだけど、ちょうどあれから10年経った40歳の頃、大きな転機があったんだ。

—どんなことがあったんですか？

**伊勢：**たまたまインドの少数民族の村へ行こうと思っていたんだけど、その直前にインド西部地震(2001年)という大地震が起きたんだよね。行こうかどうか迷いつつ、現地に入ったら、そこには自然災害の凄まじさだけでなく、カースト制によるむき出しの貧富の差があったんだ。支援されるのは富裕層のみで、底辺にいる人はもともと家もないんだから支援されない。その光景は衝撃だった。

—そんなことがあったんですか。

**伊勢：**それで自分に何ができるかを考えるようになったんだよね。ボランティアや青年海外協力隊もあったけど、学歴や年齢の壁があってどうにもならないんだ。そんな模索をしている中、イランに立ち寄り、イランイラク戦争の跡地や、瓦礫の中で生活するアフガン難民をみて、「このまま人を当てにしてちゃダメだ」と気づいたんだよね。いてもたってもいられなくなり、単身アフガンへ乗り込んだんだ。

—それはいつのことですか？

**伊勢：**アフガニスタンの戦争終了直後、アメリカ主導の新政権が立ち上がった頃の2004年だったと



思う。今の自分にできることは何かを考え、「写真家として現地の様子を少しでも伝えることができれば」という思いだけだったんだ。帰国後、友人たちが報告会を企画してくれて、道新にも取り上げられ、話題になったんだよね。その後、スリランカの津波災害のライドショーなど開催しているうちに、スカウトされたんだ。

—スカウトですか？ もしかすると、それが「四方僧伽(しほうさんが)」さんだったのですか？

**伊勢：**そうなんだ。何事も見ていてくれる人はいるんだなと思った。宗派の枠を超えた全国各地の仏教のお坊さんを中心にできた組織で、バングラデシュやミャンマーなどアジアの貧困に苦しむ人達を対象に「ブッダバンク」を



バングラデシュでの「ブッダバンク・プロジェクト」の様子

設立して自立支援するという団体（一般社団法人）がその「四方僧伽」で、メンバーで当別町に住む僧侶の上川泰憲<sup>たいけん</sup>さん（現在代表）に声をかけてもらったんだ。

—そうだったんですか。

**伊勢：**支援開始から10年がたち、今年は現地リーダーを招いて日本で報告会を開催するまでになった。僕も役員、事務局、そしてブッダバンクのリーダーとして、今は主体的に活動に参加しているんだ。

—ある意味、当時の夢が叶ったのかもしれないね。

**伊勢：**そうかもしれないね。お金も肩書も何もなかった僕だけれど、強い想いだけはあった。それが、今につながったのかもしれない。

—すべてはウルトラQから始まったんですね。

**伊勢：**そうだね。実はこれまでの人生で一度だけ、あのウルトラQの中で感じた思いに近かったことがあるんだ。

—それはどんなことだったんですか？

**伊勢：**それは東北の震災ボランティアなんだ。3.11の。

あの時も、いてもたってもいられなくなり、ちょうど上川さんが

東北へボランティアに行くというので、ハサミをもって一緒に車に飛び乗ったんだ。

何も無い瓦礫の町で被災者の方々の髪を切らせてもらっていた時に、何とも言えない感謝の気持ち

が心の底の方から湧いてきたんだよね。「切らせていただいてありがとうございます…」そんな感じだった。

お金でも何でも無い、それは無条件の愛といってもいいものかもしれない。逆にこちらが癒されているような感じすらあったんだ。

—そうでしたか。それは得難い体験でしたね。

**伊勢：**たくさんの方がヘアカットの順番を待っていたので、少しでも多くの人をカットしてあげたかった。このまま倒れてもいいとさえ感じたほどだったんだ。まだ電気などインフラは一切回復していなかったのだから、たくさんの方が待っているにもかかわらず、日が

暮れると同時に終了しなければならないのが、とても、とても、悔しかった。その夜、疲れ果てて寝ている僕の寝顔は成仏してるかのようだったと、誰かが言った（笑）。

この時、あのウルトラQの渦の答えに近づいた気がしたんだよね。

人の活動というのはどんなに綺麗事を言っても、何らかの見返りを求めているものだけれど、その時はそれが全くなかった。「生きてよかった」「美容師をやってよかった」そんな思いが込み上げてきて、たぶん、これまでの人生で最高の日々だったと思う。被災者の方々の下さった「笑顔」という対価は、どんな高額な料金よりも尊いものに思えたんだ。

—そうでしたか。もしかしたらそのように愛を与え、受け取る事が、人がこの世に生まれ、生きる目的の一つなのかもしれませんね。

**伊勢：**いまでも何とかその感覚に近づきたいというのが偽らざる心境なんだ。

—では、伊勢さんのウルトラQへの道はまだまだ続きそうですね。

**伊勢：**死ぬまで続くだろうね（笑）

（文責：島田 浩）



3.11 震災ボランティアにて